

モーゼス・メンデルスゾーン

カントと同時代人に、モーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn (1729-1786) というユダヤ人の啓蒙主義思想家がいた。彼は独学で哲学を修め、また諸外国語にも堪能であった。ベルリン・アカデミーが募集した懸賞論文では、数学的証明を形而上学に援用する論文により 1 位 (カントは 2 位) を取るなど、優れた才能を示した。しかし、当時のドイツでユダヤ人の教職は認められず、身を実業界に置きながら在野の哲学者として生涯を送った。彼は「同化ユダヤ人」として単なるユダヤ教哲学を超えて、普遍的な宗教哲学者としての地歩を築いた。

メンデルスゾーンはまた、人格高潔な人物として在世中から知られていた。「ドイツのソクラテス」とも呼ばれ、レッシングの戯曲『賢人ナータン』のモデルにもなった。この戯曲の中では、「三つの指輪」の話が登場する。三つの指輪とは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を喩えて言ったものである。この三つの宗教は同じ父なる神から生まれた息子であるが、父なる神に直接まみえることができない今となつては、これらの宗教の真理を判定する基準は、それぞれの信者がその教えにふさわしい生き方をする⁽¹⁾ことでしか示すことができないというのである。

ところが、スイス人牧師で作家のラーヴァターは、メンデルスゾーンの立派な人格の噂を伝え聞き、「それほどすぐれた人物は当然キリスト教徒でなければならぬ」と、彼にユダヤ教からキリスト教へ改宗を勧告する公開状を出した。これに対して、メンデルスゾーンは、ユダヤ教は啓示された律法であつて宗教ではなく、また自然理性 (科学的認識) と人間の信仰の普遍性は両立する旨を主張する弁明書を刊行し、ラーヴァターの勧告を退けた。⁽¹⁾ラーヴァターなる人物、何という余計なお世話、何という思い上がりであろうか。

キリスト教社会のヨーロッパにあつては、そうしたユダヤ教蔑視の雰囲気があつたのは事実である。メンデルスゾーンが有名になればなるほど、その世界市民的で啓蒙主義的な思想にもかかわらず、彼はユダヤ人として有名になるばかりであつた。ユダヤ人にとっては、キリスト教徒になることが社会的成功のパスポートであつた。彼の意に反して、メンデルスゾーンの子供たちは皆キリスト教に改宗してしまつた。彼の孫の作曲家フェリックス・メンデルスゾーンは、熱心なプロテスタントの信仰者としてよく知られている。彼は、埋もれていたバッハのマイ受難曲を再演して好評を博し、また堂々たる交響曲「宗教改革」を作曲したのだった。

ユダヤ系思想家の世界志向性

ユダヤ教がユダヤ人の民族宗教であるのに対して、キリスト教は人類に開かれた普遍的世界宗教であると言われる。教えの内容としては確かにその通りかもしれない。しかし、個々の思想家を見ていると、それとは違った姿が見えてくる。ユダヤ系の思想家の場合、マルクス、フロイト、フッサール、ブーバー、ベンヤミンなど、いずれも世界市民的な志向性を持った思想家が多い。一方、ドイツ観念論のフィヒテやヘーゲル、20 世紀ではハイデガーなどがそうであるが、キリスト教的立場に立

つ思想家のほうに、しばしば国家的・風土的な固有性・特殊性を感じることもある。その北欧版がキルケゴールであり、彼の思想にはデンマーク国教会や北欧ロマンティックとの関わりが深い影響を与えている。してみると、キリスト教が教えとして世界志向 (グローバル) な分だけ、キリスト教思想家は地域志向 (ローカル) になり、ユダヤ教の教えが地域志向 (ローカル) な分だけ、ユダヤ教 (人) 思想家は世界志向 (グローバル) となるのであろうか。我々は、そこに生身の人間における思想の普遍性と特殊性の逆説的關係を見ることができる。

キルケゴールの場合は

キルケゴールは、「人間いかに生きるべきか」を徹底して掘り下げ、実存思想に大きな影響を与えた。彼自身も自らの実存を賭して、このテーマを考え抜き、生き抜いた。だが実のところ、彼自身の本当の問題意識はそこにはなかつた。彼はむしろ、キリスト教世界に真実のキリスト教、すなわち新約聖書のキリスト教を導入するという、特殊の中の特殊ともいべき自覚と使命感を持っていたのである。そして、そのことが徹底してなされたがゆえに、彼の問題意識は、人間が真に人間として生きようとする限り、必ず引き受けるべき普遍的な問題意識へと突き抜けることができたのであつた。

最晩年のキルケゴールはデンマーク国教会を相手に「教会の嵐」とも形容される教会闘争を行い、ついに力尽きて路上に昏倒して病院に運ばれ、そのまま亡くなった。42 歳の人生であつた。デンマーク国教会という巨大な存在に単身で立ち向かうのは、蟷螂の斧を振り上げるに等しい。真実のキリスト教を探求するのであれば、それまで通り自らの信仰信念の下で教化的著作を書き続けても良かったのではないか。しかし、彼にとっては耐えきれないところまで、デンマーク国教会のあり方が彼の信仰的危機感を襲つたのであろう。

キルケゴールの教会闘争は、ある意味きわめてローカルなものであつた。しかしローカルな問題であっても、その問題を根底から徹底的に掘り下げて行くことによって、グローバルなものに突き抜けていくことができる。キリスト教思想家キルケゴールが非キリスト教圏でも広く読まれるのは、そこに理由がある。これは、ユダヤ系の思想家たちが最初からグローバルな志向性を持って、その思想を展開しているのとは対照的である。

どの人間も、一人ひとりが掛け替えのない個人 (単独者) であり、また自分自身が生まれ育つた国や風土や言語と切り離すことができないと同時に、普遍的な人類共同体の一員でもある。それゆえ、思想家がどの宗教的立場に立ち、どの思想的展開を目指す場合でも、何らかの形でローカルな要素とグローバルな要素とが両方必要になってくる。そして、卓越した思想にあつては、そうした普遍性と特殊性がとことんまで突き詰められ、緊張感を持って共存しているのである。

[註]

(1) 山下肇『近代ドイツ・ユダヤ精神史研究』有信堂高文社、1980 年、54 頁。